



オペラへの情熱と愛で
舞台の世界に新風を巻き起こした鬼才

栗國 安彦

オペラ 演出家

1941 - 1990

Profile

1941年沖縄県南大東島生まれ。東京声専音楽学校オペラ研究科修了後、バリトン歌手として65年藤原歌劇団合唱部で活動を始める。67年に演出助手、舞台監督助手を務め、舞台製作の道に入る。69年イタリアに渡り、76年サンタ・チェチーリア音楽院演出科を首席で卒業。同年ローマ歌劇場『秘密の結婚』でマルチェッラ・ゴヴォーニ演出の助手を務め、帰国直後の藤原歌劇団同演目で国内演出デビュー。以後、日本を代表する演出家として活躍、昭和音楽大学助教授を務める。90年没。

声楽家から演出の世界を志し、すぐに単身イタリアに渡って修行を開始、イタリア語から舞台演出法まで、すべてを叩き上げて学んだ。本場で高評価を得て、帰国後は本場の作法と水準に、沖縄出身の日本人としての感性をしなやかに生かした名舞台を作り続けた。48年の短い生涯で、わが国のオペラの水準を一躍引き上げた。

沖縄に生まれ、世界のオペラを目指す

彼がいなければ、日本のオペラ演出は数十年遅れていたかもしれない。約半世紀前にイタリアに渡り、本場の原語と空気を肌で感じながら、世界最先端の演出を学び取り、心に残る名舞台を作り上げた栗國安彦。

出身は沖縄県南大東島で、中学から沖縄本島で過ごし、そのアイデンティティを生涯持ち続けた。上京して入学した東京声専音楽学校では、オペラ研究科で声楽を学び、1965年にはバリトンで藤原歌劇団に入団。その2年後には長男・淳が誕生したが、同時期に演出に興味を持ち始め、林三好のもとで舞台監督助手を務める。さらなる勉強の必要性を感じた栗國は、1969年に単身イタリア行きを執行するのである。

イタリア留学は8年近くに及んだ。想像を絶する苦労を重ねながらも、サンタ・チェチーリア音楽院を首席で卒業し、ローマ歌劇場で演出助手を務めるなど、大きな成果をあげた。

イタリアから日本のオペラへ

帰国後、栗國が手掛けた『秘密の結婚』[チマローザ]は、日本のオペラ界に驚きを与えた。「いままでの演出とまったく違い、歌い手たちも“これが本格的なオペラ演出か”と受け止めた。日本人であれだけイタリアの香りを出せる人はいなかった」(下八川共祐)。日本語上演が多かった1980年までは自ら訳詞も担当。いずれにもイタリアでの研鑽と栗國ならではの瑞々しい感性が反映されていて、生き生きとした舞台が実現していた。



日本のオペラ界で鮮やかなデビューを飾ったのち、出身地の沖縄で凱旋公演を行い、熱烈な歓迎を受けた。(写真提供：本宮寛子)

「イタリアのスタイルをただ持ち込むだけではなく、栗國安彦ワールドとして表現していました。特に、訳詞は、ストーリーの意味を大事にしなが、子音・母音の発音をどうするか、すごく悩んでいたことを覚えています」(栗國淳) 「それまでの日本では、言葉を先に言って芝居がくる、いわゆるアテプリが多かったけど、オペラの本場で学んだ彼の演出は芝居の動きが先にくる。そのスピード感の違いは大きかった」(星出豊) それまでの日本のオペラになかった芝居を重視する姿勢は、イタリアオペラにおける人間ドラマのリアリティを出す上でも欠かせないことだった。

「藤原歌劇団で研修生制度を立ち上げる際に、彼が大事にしたのはアルテ・シェニカ(オペラ歌手のための演技作法)でした。それを基礎として、その後で演出家が演出をするということです。ですから1年間は徹底的に芝居の先生に教わることになる。このことは私としても大変勉強になりました」(下八川共祐)



大学での公開授業より。右はアルベルト・レオーネ。

「栗國ファミリー」が遺したもの

かつて渋谷に存在した「渋谷ジャン・ジャン」(1969-2000)という伝説的な小劇場で、栗國はある時期、集中的に舞台を作っている。「ただ小さい空間でオペラを、ではなくて、あの渋谷ジャン・ジャンというアンダーグラウンドの雰囲気の小劇場でオペラをやる、という狙いが大きかったと思う」(栗國淳)。演劇用の収容200人弱という環境で、1幕もののコミックオペラ『電話』[メノッティ]やモノオペラ『玉章』[金井徹]などによって、それまで誰も観たことがないオペラ空間を創出してみせた。本場イタリアのオペラを日本に伝えた、と

いう枠に収まりきらない、劇場におけるリアリズムを徹底的に、かつ自然に追及した「鬼才」としての側面である。

それを成り立たせたのは、「栗國ファミリー」と呼ばれる仲間たちの存在が大きかった。「栗國先生が『やろうよ』とおっしゃれば、私たちはみんな、それがどんなことでも、すぐについていきました」(郡愛子)。歌手、指揮者、演出家、大道具、美術、照明、衣裳……栗國の舞台に関わるスタッフは毎日のように稽古終わりにお酒を酌み交わし、芸術論に華を咲かせたという。その濃い付き合いによる阿吽の呼吸があったからこそ、大劇場での正統派の舞台だけでなく、渋谷ジャン・ジャンでの先鋭的な舞台も果敢に取り組むことができたのである。

人懐こい「鬼才」

栗國の「鬼才・奇才」ぶりを示すエピソードは、演出以外でも語り継がれている。カーテンコールで演出家としては出ないのに、舞台のちよい役では出たがる。渋谷ジャン・ジャンでの『ボクシング』[トザッティ]というオペラにボクサー役で出たら、間違っでカウンターパンチをもらって舞台上でノックアウトされてしまった。飲み会では、ビールを温めた“爛”ビールを必ず飲む……彼と関わった人々の口にする数々のエピソードは、シャイで情熱的で人懐こい栗國の人物を映し出している。「誰とでも仲良くなる。人間が大好きで。舞台に関わるどんな人にも愛がありました」(本宮寛子)

わずか48歳という短い人生を濃くたく生き抜き、日本オペラの黄金期に未来への種を蒔いて、次の世代につなげた栗國安彦。関わる人々との濃密な関係性、火傷せんばかりの芸術への情熱など、いまは稀少なものになってしまったかもしれない。しかし、彼の舞台におけるリアリズムを追及した演出法と、本学に遺された指導法からあふれ出る“熱のない舞台など存在し得ない”というメッセージは、彼の舞台や指導に触れたすべての人々の記憶に刻まれている。

日生劇場芸術参与/
新国立劇場オペラ研修所主任講師/オペラ演出家
栗國 淳

日本歌曲振興会の会長/声楽家
本宮 寛子

日本オペラ協会総監督/声楽家
郡 愛子

東成学園理事長
下八川 共祐

昭和音楽大学客員教授/指揮者
星出 豊 (S38年度東京声専卒)